

法 然 の 仏 身 観

——特に化身について——

高 橋 弘 次

一

法然の仏身観（阿弥陀仏観）は、およそ報身論、三身即一論、真化二身論の三つの立場から論じられている。その内容についてはすでに究明されているが、少しく私の立場からこれを論究した。しかしその法然の仏身観にまつわる化身については、これが体系的に詳しく究明された論述をみることはできないようである。そこでこの小論においては、法然の仏身観において、とくにその特異性が見出される真化二身論にかかわる問題として、化身がどのように説き示されているか、またこの化身が真身とどのような関係にあるのか、さらにこの化身をどのように受けとめればよいのか、といった問題を取り扱つてみたい。

二

法然の仏身観（高 橋）

法然は『逆修説法』（初七日）において、阿弥陀仏の真身に對する化身を「無而歛有云レ化者隨レ機應レ時現ニ身量大小不同」と説明して、続いて(1)円光の化仏、(2)攝取不捨の化仏、(3)來迎引接の化仏、という三つの化仏をあげている（これらの化仏についてはすでに論じたのでここでは省略する）。

そこでこの化仏（化身）がどのように化現するのか、ということについて法然は『逆修説法』（四七日）に、源信の『往生要集』（中）に阿弥陀仏の白毫相が説かれている、その内容にもとずいてつぎのように説き示している。

次白毫作用者、謂白毫所レ放光明中現ニ衆事一也。惠心意云ニ其所現之境界不レ出ニ法界一。謂應ニ以ニ仏身ニ得度者、即現彼白毫光一作ニ仏身一。付ニ其仏身ニ有ニ一。一始終應同身、二無而歛有身也。始終應同者、如ニ釈迦如來現ニ八相一也。無而歛有者、不レ現ニ託胎出胎之相一、不レ現ニ出家成道之相一、只忽然而現之仏身也。或又現ニ菩薩身、如ニ普賢文殊觀音勢至地藏等一者、即菩薩也。然者彼等諸大菩

薩、弥陀白毫所現坐覽。又或_レ以_二辟支仏身_一濟度_レ者、彼白毫光現作_二辟支仏_一。辟支仏者、前仏法滅、後仏未_レ出之中間而出、非_二仏教_一、唯見_二飛花落葉_一獨開_レ悟也。故云_二獨覺_一。此獨覺有_二一_一。一麟喻獨覺、二部行獨覺也。或又現_二聲聞身_一、如_二釈迦仏御弟子舍利弗目連迦葉阿難等_一者、即聲聞也。不_レ知、弥陀如來白毫光為_レ助_二釈迦化儀_一現_二彼諸大声聞_一給覽。或現_二梵王身_一、或現_二帝釈身_一、或現_二國王大臣身_一、或現_二長者居士身_一。凡比丘比丘尼優婆塞優婆夷天竜夜叉乾闥婆緊那羅乃至地獄鬼畜生修羅、如是等_二一切身_一、隨_レ宜無_レ不_レ現。就_レ之得_レ意者、惣六道四生一切凡聖、併被_レ覺_二弥陀如來之毫光所現歟_一者也。非_二當此白毫一相_一、惣八万四千相、一々皆如_レ此現_二一切身_一也。然法界中、但弥陀一仏之遍給也。

この説明にもとずくならば、化身、菩薩身をはじめ一切の身（相）は、阿弥陀仏の白毫より放つ光明によつて化現するものである。この法然の説き示す化身の内容は、直接的には法然もいうように「恵心の意」によつたものであるが、その根拠とするところは、『観無量寿經』などに説示された「光明摂取」という阿弥陀仏のはたらきをはじめとする、仏の具体的なたらき（化用）にもとずいていることは明らかである。この化仏、化菩薩などの化現については『観無量寿經』の「三輩九品」のところで詳しく説示されているが、同經の第十觀（観音觀）に、

眉間毫相、備七宝色、流出八万四千種光明。一一光明、有_二無量無

數百千化仏。一一化仏、無數化菩薩以為_二侍者_一。變現自在、滿十方世界。^③

とあり、また第十三觀（雜想觀）には、

阿弥陀仏神通如意於_二十方國_一變現自在。或現_二大身滿虛空中_一或現_二小身丈六八尺_一。所_レ現之形皆真金色。円光化仏及宝蓮華如_二上所_一説。觀世音菩薩及大勢至於_二一切處_一身同。衆生但觀_二首相_一知_二是觀世音_一知_二是大勢至_一。此二菩薩助_二阿弥陀仏_一普化_二一切_一。

とある内容など、化仏、化菩薩などの化身が説き示されるのに、もつとも相應する典拠となる個所である。

三

このように化仏、化菩薩などの化身は、阿弥陀仏の白毫より放つ光明によつて化現するとされ、またそれが「神通如意」、あるいは「變現自在」という阿弥陀仏のはたらきにもとずくものであることは明らかである。さらに法然はこれらが阿弥陀仏の「正報功德」のはたらきであるとして『逆修説法』（五七日）につきのように説き示している。

観音勢至及彼土所有菩薩人天、併彼仏正報功德也。都彼國人天目鼻非我物、皆仏願力所成之功德也。頭目髓腦、五体身分、無_二一非_一阿弥陀仏願。譬如_二此娑婆世界人子身体髮膚_一、併分_二父母身_一。即此經被_レ説四十八願可_レ候也。五通願、悉皆金色等願是也。然者唯阿弥陀仏為_二彼國一切菩薩人天_一入_二目成天眼通_一、入_二耳令_一得_二

天耳通、入心令得他心智宿命智、成足令得神足通、成膚成金色身給也。具足諸相願亦如是。生彼國人、六根六識併阿弥陀仏之入給也。

諸菩薩、人などすべて阿弥陀仏の願力によるものであり、正報の願力功德によらざるものは何一つとしてないというのである。さきの「神通如意」であることも、「変現自在」であることも阿弥陀仏の「願力所成」、「正報功德」によるものであり、化仏、化菩薩などそれらの独自のはたらきを認めることはできないのである。

四

この化仏、化菩薩などの化身は、もとより阿弥陀仏（真身）の化用によるものであるが、その三種の化身（円光の化仏、攝取不捨の化仏、来迎引接の化仏）が指摘されるなか、もつともその特徴が見出されるのは来迎引接の化仏（化身）であろう。法然は『逆修説法』（初七日）に、

次来迎引接化仏者、九品来迎各々有化仏、随品有多少。上品上生来迎、真仏之外有無數化仏、上品中生有千化仏、上品下生有五百化仏。乃至如是次第減、下品上生真仏不_レ来迎、但遣_二化仏_一觀世音化大勢至。其化仏身量、或丈六八尺、化菩薩身量随_二其_一。下品中生天花上有_二化仏菩薩_一来迎。下品下生命終之時見_二金蓮花猶如_二日輪_一住_二其人前_一。

法然の仏身觀（高橋）

といつてゐる。もとよりこれは『觀無量寿經』の説相にもとずくものであることは明らかであるが、この来迎の化用について法然はつぎのように説いている。

来迎引接願者、即此四十八願中第十九願也。人師釈_レ之有多義。一先為_二臨終正念_一来迎。所謂疾苦遍身將欲_レ死之時、必起_二境界自体_一当生三種愛心也。而阿弥陀如来放_二大光明_一現_二行者前_一時、未曾有事故歸敬心外無_二他念_一。而亡_二三種愛心_一更無_レ起。且又仏、近_レ行者_一加持護念故也。稱讚淨土經說_二慈悲加祐令_二心不_レ亂_一、既捨_レ命已、即得_二往生_一住_二不退轉_一。阿弥陀經說_二阿弥陀仏与_二諸聖衆_一現在_二其前_一、是人終時心不_レ顛倒、即得_二往生_一阿弥陀仏極樂国土。令心不_レ亂与_二心不_レ顛倒_一、即令_二住_二正念之義_一也。然者非_二臨終正念_一故来迎、来迎故臨終正念之義明也。在生之間往生行成就人、臨終必可得_二聖衆来迎_一。得_二来迎_一時、忽可_レ住_二正念_一也。然今時行者多不_レ辨_二其旨_一捨_二尋常行_一、生_二怯弱遙期_一臨終時_一祈_二正念_一、最僻胤也。然者能々意得_二此旨_一、於_二尋常行業_一不_レ起_二怯弱心_一、於_二臨終正念_一可_レ成_二決定思_一也。此是至要義、聞人可_レ留_二心_一。此為_二臨終正念_一来迎云義、靜慮院靜照法橋釈也。

この来迎の化用に関する説明は、とくに来迎正念の義は靜照の釈によつたものであるとはいへ、これは『阿弥陀經』の所説にもとずくものであり、来迎にはこれに加えて、先達の義、魔事対治の義の三義があるとされるのである。来迎にこれら三義の化用があるとしても、すべて阿弥陀仏の願力所成によるはたらきであり、「神通如意」の「変現自在」になるもの

であつて、またこれが「法爾道理⁽¹⁾」であると表現されるのも説明を必要としないであらう。

五

化仏、化菩薩とよばれる化身は、變化身とも称せられるが、それは *nirmāṇa-kāya* を原語としてゐる。この *nirmāṇa-kāya* は *body of magic transformation* と説明され、またその *nirmāṇa* は *nir + mā* からなる語で、*measuring, forming, creating, building, work* などの意味をもつ語である。

このような意味内容をもつ化身は、真身（阿弥陀仏）がもつと見做される体、相、用の三様態のなか、とくに相（*forming, building*）と用（*work*）との化用をもつて、衆生にかかわることを示しているといえる。すなわち化身には相と用とはあつても体はなく、あくまで化身の体は真身（阿弥陀仏）にあるというわけである。化身（*nirmāṇa-kāya*）が *body of magic transformation* といふ表わされるが、そのマジックはたんなるマジックではなく、真身（阿弥陀仏）の神通如意、變現自在が、衆生にとつてそれはマジックのように受けとめられることの意味であるといえよう。もとよりそれは阿弥陀仏が如来（*tathāgata*）——（如実に来至せし者、如実より到来せし者）と称せられる、そのもつとも衆生にかかわる具体的な化用としての相と用とをあらわしているものと解され

る。

このように来迎をその特徴とする化身の作用は、それは法爾道理といふ表わされるとしても、真化二身の衆生にかかわるそのあり方において、もつとも宗教的な性格をもつものであり、三身論などにみられる仏身論の哲学的な性格とはおよそその内容を異にするものといえる。

- 1 拙稿「法然上人の仏身觀の特異性」香月乗光篇『浄土宗開創期の研究』所収。
- 2 法然上人全集（石井編）二二三頁。
- 3 前掲拙稿を参照されたい。
- 4 浄土宗全書一五の八六頁。
- 5 浄土宗全書一の四四頁。
- 6 浄土宗全書一の四六頁。
- 7 法然上人全集（石井編）二六三頁。
- 8 法然上人全集（石井編）二二三頁。
- 9 浄土宗全書一の四六、五〇頁。
- 10 「阿弥陀仏与三諸聖衆」現在三其前。是人終時心不顛倒即得往三生阿弥陀仏極樂国土」（浄土宗全書一の五四頁）。
- 11 「禪勝房伝説の詞」に「仏の来迎は、法爾道理にてそなはるべきなり。」とある（法然上人全集—石井編—四六二頁）。
- 12 長尾雅人氏稿「仏身論をめぐる」（『哲学研究』第五二二号）には、變化身の原語は *naimāṇika-kāya* とされている。
- 13 F. Edgerton-Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary, p. 302.
- 14 Monier-Sanskrit English Dictionary, p. 556.
- 15 「大乘義章」（大正藏經四四の八三八頁）の所説による。前掲拙稿の「法然の三身即一論」の項を参照されたい。
- 16 望月信亨編『仏教大辞典』四一四一頁。